

## 旅行記

## タイの僧院を訪ねて

大澤 伸 雄

佛教の研究を志す者、とりわけ戒律思想に関心のある者なら誰しも一度は訪問したい憧れの「佛教の国——タイ」の事情の一端を見学する機会を得た。幸いにもはじめての旅行に昭和十九年以後二ケ年余にわたりタイの僧院において出家修道の御体験をおもちの本学名誉教授の佐々木教悟先生に実地での御指導をお願いすることができた。そして旅行計画も「南方上座部佛教の僧院（僧伽）の実情を研修しながら、戒律の生きた姿を学ぶこと」を中心とした。また旅程の中には安居（七月十五日～十月十五日）や布薩、日曜日の説法会などが組み込まれるなど、短期間ではあったが僧伽の主要な行事にも接することができたのである。またバンコックばかりではなく、北の古都チェンマイの僧院も見学することができた。

この旅行記では多くの印象を整理して、前半ではバンコックの僧院における諸行事を戒律の観点から報告し、後半においては最近注目をあびているタイ佛教教団の中における新しい動向

の一つを記録してみた。特に後半はまだ日本の学界に紹介されていない点であると思われるからである。

一九八一年九月二十六日午前十時、大阪空港を離れ、台北・香港を経由、バンコックのドムアン空港に到着したのは現地時間の午後八時過ぎであった。入国の手続きを終えた我々一行は意外にも二人の黄衣の比丘の出迎えをうけた。この比丘たちはバンコック市内のワット・リエブ(Wat Lieb)に住するマハー・プラスエー比丘と同寺の境内にある日本人納骨堂主事の藤井隆照師ことタンマローチャノー比丘とである。ワット・リエブは佐々木先生が出家されて沙弥の期間をすごされた寺でもあり、恩師であるプラ・クンチャラワット長老が八四歳の今もお元気に住職を務めておられる寺である。これらの方々の現地での御配慮によって、我々の研修旅行は予想外に大きな成果をあげることができたのである。

## 一

さて第二日目の二十七日は早朝六時半よりワット・ベンチャマポピット(Wat Benchamabopit・大理石寺院)に出かけ朝の托鉢の光景を見学することにした。この寺の門前には在家信者の家族がそれぞれのマイカーで供養のための御飯・副食物・線香、そして白い蓮や紫の蘭の一種の花などを用意して、一人一人の沙弥や比丘に丁寧に献げている。車のトランクの中にまで入れた大きな銀色の器の中には食物の包みがいっぱいはいり、それらを鉄鉢の中に一つ一つ入れて礼拝する信者の敬虔な

姿に心うたれながらも、一方では素足のままの比丘や沙弥が「応供」を自認してのことか、無表情にして毅然と受けとる姿に出家佛教界の独自性を感じた。これらの日常の供養のうち、とくに大供養は、家族の誕生日や父母の命日などそれぞれ記念すべき日を選んで行われるのであるという。またよほど経済力のある人達でもあろう。もちろんバンコック市内のあちこちの街頭や路地では、所謂「貧者の一燈」ということがみられる。

また一般的にタイの僧院の前には小鳥や亀や蛇を売る子供達がいる。これは参詣者がこれらの生き物を買ひ求めて放生するためであり、この不殺生の行為が功德利益のある善きことと考えられているからである。この寺は観光寺院としてもよく知られている寺であるが、王族や貴族、富裕者の子弟が出家する場合が多いという。出家に貴賤の別があつてはならぬが、僧院にもこうした格差があるようである。

その後我々はバンコックにおける佛教の諸活動の一大中心地であるワット・マハータート(Wat Mahathat)を訪れた。ここではマハー・プラサーニー比丘の案内で諸殿・諸施設を拝観した。二十七日は日曜日であるために僧院の中庭には露店が所せましと出て信者で賑わっていた。また毎週定例の説教や一般信者の誦経の様子も見学することができた。説教は広いウィハーーン(伽藍)で僧俗共に聴くものであり、タイの民衆の生活の中に佛教が根づいているという感を益々強くした。堂内に響きわたる説法は独特の旋律と音調をもつて、暑いさ中の大衆をとらえていた。またこの寺には数多くの Section があつて、それぞれ

れに長老が担任して独自の指導理念と方法をもつて出家在家に教化指導をほどこしている。また境内のあちこちの大小のホールでは佛教講演会ともいふべきものが開催されていたが、中には在家者が講師になつている会場もあつた。おそらくこれらの人は選俗者か大学の先生であろうかと推察された。これらの会場の一つホー・タムナックで説法を終えたキッティウットー長老(後述)に出会つた。またこの境内にはマハーニカーイ派の佛教大学であるマハーチュラロンコン佛教大学(Mahachulalongkorn Buddhist University)があるが、残念ながら休日のため中を見学させてもらうことができなかった。

午後はワット・プラケオ(Wat Phra Keo・王宮寺院)や国立博物館、ワット・ポー(Wat Pho・涅槃佛寺院)などを訪れたが、ワット・プラケオには比丘などの出家者は止宿せず、王室の重要な行事をする時に各地から有徳の長老たちが集會して儀礼を執行することであつた。ここでも日曜日の説法会は行われていたが、広い堂内は満座で入口にあふれており、中に入ることさえできなかった。ここは何よりも建物の絢爛豪華さに驚かされるのであるが、現チャクリー王朝創始二百年の記念事業をひかえ、大修復作業が進められている。またこの旅行を通じて、タイのあちこちの僧院では修復・新築の工事がすすめられていたが、この記念事業の一環であるという。タイ絵画を代表する廻廊のRānakienの壁画も修復されていた。王室と佛教教団の密接な関係もタイ佛教の一つの特徴と考えられる。

二十八日は「東洋のベニス」ともいわれるバンコックのメナム川河口にある数々の運河を遊覧船でめぐり、水上マーケットを見物してから、運河ぞいにあるワット・パクナム (Wat Paknam) を参観した。この僧院は広大な敷地をもち、数多くの諸設備をもっており、建物の修復・新築も急ピッチで進められている。また我々はタイの僧院の風景にもようやく慣れてきたが、この日はワン・プラ (Wan Phra・佛日——毎月四日の齋日) のために比丘・沙弥・沙弥尼、それからチープレイング (Choeiphienwong) や、多くの在家の男女が説法を聞いている。このチープレイングとは有髪で、但し眉毛は剃っているが、灰色の沙弥尼衣同様の白法衣を着用した婦女子である。これは父や母、夫や子供を亡くした後など、しばらくの間を限って寺院に止住して聞法修道する人々のことである。先のワット・マハタートでも見かけたが、僧院内の別棟に居住し、僧院でいろいろな雑事にも奉仕する熱心な優婆夷ということができている。これらの人々の存在は、出家の五衆ということからも考えられぬし、法衣の着用が許されることなども拘子定規には理解できないが、これは女性信者が佛教を深く学び実践できる機会をつくるためのタイ佛教独自のあり方と考えることができる。今日の南方上座部佛教圏においては比丘尼は皆無であり独自の教団を形成していないから、剃髪した沙弥尼に相当する人々も比丘僧伽に依止している。

この僧院には日本の曹洞宗僧侶である真瀬義光師が五年程前から留学僧として比丘となり修道を重ねておられる。真瀬師の御案内で任職のブラ・タンマ・ティララート・マハムニ長老や副任職のブラ・パーワナ・コーソン長老にも面会することができた。任職はタイの高僧たちの長老会議(文部省宗教局と僧伽の合議で選出)の十人のメンバーのうちの一人でもあり、有徳の長老としてつとに知られたお方である。また副任職は日系人であり流暢な日本語で我々を親しく迎えて下さった。また博物館(宝物館)や図書室などを案内していただいたが、禅定室は完備されたものであり、この寺に伝承される独自の瞑想法を説明していただいた。これらは在家信者にも開放されており、宿泊施設も近代化されているし日本とも交流のすすんだ僧院である。ワット・パクナムを後にして、チャオプラヤー河の船上からはるかワット・アルン (Wat Arun・暁の寺) の高くそびえたつ大塔をながめながら船をおりた。午後からはバンコック市内にひときわ高い人工の山の上に金色の佛舍利塔をもつことで有名なワット・サケー (Wat Sathat) を訪れた。「黄金の山」といわれる金色の塔から眼下に市内を一望することができる。この様な有名観光寺院ではあるが、僧院における修道教化の面においてもきわだったものがある。まず我々はプロマ・グナーボン (Phromagnahorn) 任職に客室で面会歓談した。きわめて明朗で国際性に富んだお方であり、学徳兼備の壮年比丘として、タイの佛教界を荷負していく気力にあふれた長老であった。次期はタイ国の大長老とし

て最高位の大僧正になられるお方であると聞く。またこの僧院には現在百五十八名の比丘と沙弥が止宿している他、月曜日から金曜日までの間には他の僧院から約三〇〇名の研修者が来寺するとのことであった。また民衆相手に人生相談やカウンセリングなども行われており、そのための教化研究施設も備えられている。まさに清潔で静寂な中にも厳しい学佛道場としての雰囲気を感じられた。

ちなみに名古屋の覚王山日泰寺の佛舍利はこの寺から贈られたものであるという。日本からの留学僧も過去には多く、またこの寺のデク(寺男)であったピータック・ブッタラクム(Pitak Buttakum)氏は戦後大谷大学に留学生として学んだという(昭和三十三年三月短期大学部佛教学科卒)。

我々の訪タイの目的を理解した長老の特別のはからいで、この寺の布薩を見学することが許された。戒律を研究した者なら誰でもわかる様に、僧伽の和合清浄を維持実現するためには、半月に一回、全員の参加により波羅提木叉に於て自己の行儀を反省する布薩は、僧院における最も厳肅な行事である。そのためにタイの僧院には必ずウボン(布薩堂)があり、それはウィハイ(伽藍)とならんで最も聖域とされるところであり、八つのシーマー(結果標)に取り囲まれている。布薩の当日はその準備や進行等について規定されており、厳格には比丘以外は入堂できず、ましてや在家信者が外から見聞覚知することはできぬ世界なのである。入堂見学をゆるされた喜びととまどいを感じながらも仔細にその様子を観察することができた。この

寺では沙弥もやがては比丘となる身であるから、研修のためにオブザーバーとして出席できるのであるという。もちろん堂内の一段高いところに着座するのは比丘だけである。まず最初に佛に向って勤行を行ない、その後対面できるように輪になって坐し、波羅提木叉がパーリ文で一比丘によって朗々と暗誦されていく。合掌して無言でそれに聞かせる比丘たちの姿から、厳格な戒律佛教における最も大切な行事に真剣に取り組んでいることが理解できた。中には我々一行の存在を不審に思う比丘もいた様であり、写真の撮影もゆるされたが、その中途で堂を出た。いずれにしろ数々の高僧を輩出しているこの名刹の布薩を見学できたことは終生忘れえぬものであった。

次いで夕方から我々の旅行に終始配慮をいただいたマハー・プラスエー比丘の住するワット・リエブを表敬訪問した。我々は三年ほど前に大谷大学にも訪問されたことのあるブラ・クンチャラワット長老のお元氣なお姿と再会できた。佐々木先生が施主となられて、サーイシン(灌水系)という佛事をしていただいた。これは伽藍内で佛像の手から白の綿糸をいただき、それを手にした長老以下五名の比丘が佛像を背に我々の方に向かって誦経し、その後「聖なる水」を我々にふりかけるのである。まさに法雨ということであろうか。これは在家信者が自らの平安と佛道成就のために願ひ出て執行してもらう佛事であり、吉祥経(マンガラ・スッタ)等が誦唱された。またこの寺のワン・ブラの夕事の説法会にも多くの信者らと共に参加した。長老の説法が始まる前に在家信者の代表の一人が長老の前に進み出

て互跪合掌して三帰五戒を受ける。在家者が加わる佛事ではいかなる時も最初に三帰五戒を受けることがタイ佛教での通例であるといわれる。説法の内容は三帰五戒を基本とする世俗倫理が中心であるといわれるが、佛の教えを平易に解説するのであるという。

またこの僧院の中には在タイ日本人の納骨堂があり、そこで一同、嘆佛偈をあげてからこの僧院の比丘である藤井隆照師にいろいろとお話をうかがった。

最近のタイの僧院では「過中食」、すなわち正午以降には食事を取らぬという戒について、牛乳は非時食でゆるされるから乳製品もゆるされると理解する一部の比丘達がいるという。従ってチーズなどはいつ食べてもよいと理解している様である。

またこの寺には現在、出家者の数は決して多くはないが、パリ語の国家試験合格者で高位（九段階ある）をしめる比丘が多いという。さながら学問寺的風格をもっている僧院である。

バンコックにおける僧院の見学をしばらくおいて、二十九・三十日の両日、空路でチェンマイのチェットティルアン僧院等を見学した。チェンマイは古都であること、バンコックとは気候・風土・習慣も異なること、タイの地方僧院としての一つの類型であることなど、興味深いものであった。しかし、ここでも戒律の遵守ということは貫かれており、その意味ではタイの上座部佛教の一貫性を知らることができた。

バンコックとチェンマイにおける代表的な僧院を訪れ、厳格な出家佛教が想像の他、社会的な機能を多方面で果しながら、民衆と深く結びついている姿を研修し、「大乘佛教」とは何かということを反問しはじめた我々は、最近注目されはじめているタイ佛教の新しい試み的一端を見学することにした。それは南方上座部佛教の枠組みの中にありながらも、大乘佛教の菩薩道に学び、新しい佛教の可能性を追究しているといわれるチャタ・パワン(Dittabawan)のキティウットー(Kittivuddho)長老の僧苑である。

バンコックからバスで約二時間半、国道三十四号線のハイウェイを「東洋のハワイ」といわれるパタヤヴィーチの方向へ行き、チョン・ブリ(Chon Buri)市を越えてしばらくすると、パタヤ(Pattaya)市に入るが、市の入口のところの道路の右手に、周辺のヤシ林の景観とあざやかなコントラストをみせる新しい、また建設途上の僧苑が見えてくる。

面積は三万平方メートル(約一万坪)以上はあるであろう。国道に沿って裏手のタイ湾の美しい白砂の海岸線までを占めるこの景勝の広大な敷地の入口には、Dittabawan College, For the promulgation of Buddhism, The foundation of Abhidhammahadhatvitayalaya と記されている。これから察するに「チャタ・パワン単科大学」であり、それは「佛教の伝道のために、アビダルマの学問研究の基礎を修得するための学校」

ということになる。佛教伝道学校ともいうべきであろうか。

(私はここでは「僧苑」という言葉を使うことにする。)そして正門から入るとチッタ・パワンのシンボルである歩行釈迦の銅像が仰がれるが、その高さは五重の天蓋まで七、八メートルくらいあるであろうか。歩行し遊行する像が正面に安置されるのは、この僧苑の理念が遊行教化という積極性をもっている故であろう。この像の背後はるかに、この College の本館(三階)を見ることができよう。

この僧苑はタイの義務教育を終えた十二歳からの沙弥を九ヶ年間指導するのであるという。朝は八時から夕方の四時までで佛教に関する諸課程を教え、四時以降は現代の様々な学問を学ぶことができるのであるという。過去には八百名におよぶ沙弥や比丘が止宿・学習していたといわれていたが、今回の訪問時には四百名ほどであった。

我々はワット・マハタートに僧苑の各所を案内してもらおうことになった。

まずこの僧苑の由来は、今日から十五年ほど前に、キッティワット・比丘がこの地で頭陀行を行ったことからはじまるのであるという。その時、周囲の芋畑を所有していた資産家が、この道心あつき若き比丘に帰依し、今の敷地をこの比丘の学佛道の理想実現のために寄進したのであるという。今日でも頭陀行は厳しいものであると同時に在家者から信任のあつた修道であるとされている様である。苑内には今では頭陀行跡を記念して

六角の堂が新しく建てられている。また寄進者である元地主のチューン未亡人の瀟洒な住宅もあり、夫人が今も任んでおられるとのことである。そして、この地で最初は六十名の比丘を集めて三ヶ月間指導をして、それらの比丘を各地の僧院へ送り込むということが行われ、この僧苑の教育機関としての性格がはじまったといわれる。今でも一月から四月までの三ヶ月間この僧苑へ研究研修のために各地から比丘や沙弥が来集するという。またここで九ヶ年間を修学した若き比丘は各地の僧院から入寺の招請があるという。現在、ラオス・カンボジア・アメリカからも比丘として修道する人がいるとのことである。はじめに六十名の比丘を指導してそれらの比丘を各地に送りこんだというのは、何やら佛伝の伝道宣言あたりを偲ばせるが、キッティワット・長老のなみなみならぬ信念を伝えるものといえよう。

先にワット・マハタートでお会いした長老は、長身で体格もよく、自らの理想と信念にもとづいて佛道を行ずるという自信に満ちあふれた比丘であった。エネルギーが豊富な風貌は新しい僧伽の若き運動家として尊崇を得るであろうと推察された。ちなみにバンコックで我々のホテルのルームサービスの方が、長老の大きな写真をもった私に驚き、廊下にいたガードマンまで呼びよせて、長老がいかに優れた比丘であるかをジェスチャーを交えながら片言の英語で話してくれた。ガードマンの青年は「He is Buddha」と熱弁した。バンコックのこれらの階層の人々にとって、大きな尊敬の対象であることだけは間違いないようである。

さてこの僧苑では他の僧院とは異なり、いろいろと注目すべき作務が課せられている。これらを紹介してみることにはしたい。まずここでは出家者に印刷の技術を教え、それを修得させて、佛教関係の書物やパンフレットを印刷するという。また外部からの一般の注文にも応じており、そこで得られる収益は執事の手で管理されるのであるという。

また車の修理作業をする工場があって、その技術を修得するために溶接などをしている黄衣の姿がみられる。在家の技術者に奉仕で指導を願っているとのことであった。一名の指導者に四、五名の出家者が実地訓練を受けている。廃車になった大型バスをもらい上げて修理再生をしてから、それを全国の僧院に寄進するのであるという。我々が訪れたときキツティウットー長老自らも油にまみれながら修理作業をしておられる最中であるとのことであった。

これら印刷や車の修理再生は破戒にはならないし、佛教教化のための有効な手段を出家者自身が積極的に修得するということであろうか。

また今日のタイの若人達に人気のある映画を教化の媒体として有効的に活用している。そのために巡回映画会専用のワゴン車を何台も用意している。二本のフィルムをもって回りそのうち一本は必ず佛教関係のものを、他の一本は普通の劇映画であり、これらを各地で上映するのであるという。タイにおいても今日の若者は近代化社会に組み込まれつつあるから、佛教に接する機会が少ないので、そのための伝道教化活動であり、映画

を積極的に利用して全国津々浦々まで巡るのであるという。同じく佛教専門の番組を放送するラジオ局をもっているとのことである。受信可能範囲は不明であるが、朝の五時から夜の十一時まで放送するという。佛教は幼いうちから教えておかねばならないという長老の強い信念に基くものであるという。

私達は苑内に五、六十頭の小牛が群れをなしているのを見てみたところ、これはバンコックの富裕な人がお金を寄進されたのでそれで小牛を購入して、しばらく育てて、貧しい人々や、欲しい人々に分与するのであるという。

これらの営事はバンコックの僧院からは想像のつかぬ事例であり、戒律の広い意味での解釈としか考えられぬのである。そもそも出家者とは「常乞食」であり、生産活動に従事せぬものである。しかしここでは二百二十七戒に抵触しないから、佛教弘通伝持のための奉仕活動として転化して理解するのであろう。

さて苑内の建物については、まず苑内に無料病院が開設されている。これは僧苑ができる前からこの地にあった病院であるといわれ、明年度には國家にわたすが、あらためて病院を建設する予定があるという。ちなみに医師も奉仕であり、出家者や奉仕活動のために来ている苑内の人々のために用意されているのである。また奉仕活動のために長く滞在する人々には必要な日用雑貨などが無料で支給されるコーナーや宿泊施設も完備している。

僧苑の裏手約五十メートルの海上に堂宇を建設する作業が進

められている。そこに安置するための佛像を刻む作業がなされていたが、サラブリから石を取りよせて、チューチャイープラックンタイ比丘が一人で人生最後の仕事として完成をめざしているのであるという。この老比丘は元タイキックボクシングのチャンピオンとしてよく知られた人であるという。これら佛像に限らず建物の建設も在家の技術者の指導奉仕に加えて、出家者たちの破戒ならぬ限りでの労力で建設するのであるという。

また苑内にはプラタムナック (Phra Tam-nak・尊崇する人の殿舎) と呼ばれる堂がある。これは長老の師匠であるワット・パクナムの故モンコン・テープムニー長老を記念して供養するために建てられたものであり、祖師堂ともいうべきものであろうか。朝夕の勤行はこの堂で行われるという。またここには各曜日に礼拝するための佛像も安置されている。ちなみに、タイでは佛像を鑄造したりする場合の儀式は、バラモンを招いて執行してもらうのが通例であるという。

また長老自らが尊敬するワット・ポーの長老であったワンナ・ラタナ比丘に安居をしていたために別荘を造りはじめたが、その途上で亡くなられたので、そこで銅像をつくり安置している建物もあった。

これらは自らの師匠・先輩を崇敬し、その伝統をうけついで、この新しい僧伽運動を展開しているのだという長老の信念を内外に表明していると理解できないであろうか。

我々はこの僧苑には布薩堂がないから、明らかに本格的な僧院(Wat)ではないということはあるが、それではこの比丘達

は布薩の時にはどうするのかと質問した。すると、国道の向い側にワット・ガッティングラームという僧院があるので、そこに集会して布薩を行っているのであるという。

またこれだけの諸活動や建築の経費はどうなっているのかとたずねたら、まず在家者からの財施、ジャンクブリーというところの果樹園が寄進されたのでそこでの収益、その他破戒にならぬ限りでの労働力でまかなっているという。他の僧院の様に国家からの助成は受けていないという。この僧苑では鉢鉢はせず、厨房および食堂を設けているという。そして通常の年間総予算は日本円で約一億円であるといい、自分達の力で佛教運動を展開するため少欲知足の生活をしている様である。また別途に五億円を投入する建設計画もあり、堂宇等の諸設備も拡充していくのであるという。また長い間奉仕してくれる技術者などには気持だけの謝礼をする場合もあるという。

いづれにしろ十五年足らずにこの様な僧苑の諸設備が独自の路線で建設されつつあるということは驚嘆すべきことである。それは長老の在り方に対する在家信者の尊崇・帰依の念が如何に厚いものであるかということが知られるのである。

今日のタイの僧院は大衆の悪鬼をおそれる俗信であるピイー (Phii) 信仰の上に存立しているということも事実である。そしてその上に福田思想もささえられているのがわかる。これらの状況の中で、キッティウットー長老には何らかの危機意識もあ

るであろうし、何よりも佛教を正しく理解してもらうために教化を積極的におし出している感が深い。スリランカ・ラオス・ベトナム・カンボジア・ビルマ等他の南方上座部佛教国が社会主義化の道をすすめている。そして教団と国家との関係もそれぞれにまちまちであるが超然とした出家教団的意識だけでは大衆から見離されてしまうであろう。従って新しい僧伽の運動理念にふさわしい人材を養成することが第一と考えてのことであろう。自動車の修理技術や印刷技術の修得も選俗を前提としたものではなく、あくまでも出家者として社会参画の必要性から考えられたものである。九ヶ年間は一切の経費を必要とせず修学できるがその条件として五ヶ年間は地方の僧院で教化することが義務づけられているという。これらの活動的な比丘がタイ全国二万三千余の僧院に送り込まれて新しい僧院の形態を現出することになるかどうかはこれからの問題であろう。バンコクの戒律に厳格な長老たちから批判を受けはじめていると聞く。また学生・知識人の中にも彼の社会的活動に対して反発するむきもあるという。

これらの動向を見聞しながら私はインドの大乗佛教興起の状況をあわせて思いつつ、キッティウットー長老の今後の活動に注目をしていきたいと思う。

午前十一時、鐘の合図で四百名ほどの沙弥と比丘が二列に並んで食堂に向う。まさに壮観である。それらの若き出家者の背を見つめながら、出家とは何か、戒律とは何か、伝統とは何かを考えさせられながら別れを告げた。(一九八一・十一・三記す)

### 「佛教学セミナー」バックナンバー発売中

既発行の「佛教学セミナー」のバックナンバーを御希望の方は、佛教学研究室又は文栄堂書店に申し込み下さい。二冊以上お申し込みの方には送料を当方で負担します(一冊のみの場合、送料50円)。

1~9, 12, 14号品切れ	20 号	品切れ(特集号)*
10 号 250円	21~24号	600円
11, 13号 300円	25~31号	700円
15~17号 350円	32~34号	800円
18~19号 400円		

\* 第20号は特集号につき、別に単行本として文栄堂書店より刊行(品切れ)。

※既刊号の総目次は本誌26号に掲載されています。

10, 22号は残部僅少です。